

新千載和歌集
上

特別
8099
18(1)



4
8077
18
(1)

<2001-039>

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page. The text is written in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged paper. The script is dense and fills most of the page.



新千載和歌集卷第一

春昇上

春をしのびてふ人待つ心

皇太后皇太后

春をしのびてふ人待つ心

春をしのびてふ人待つ心

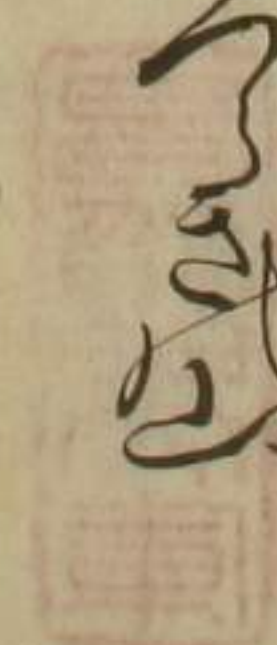
春をしのびてふ人待つ心

皇太后皇太后

春をしのびてふ人待つ心

皇太后皇太后

春をしのびてふ人待つ心



文保三年後宇多院上皇御前

後照念院用白大政大臣

いとをきまはるる心

和太細言為世

いとをきまはるる心

和元二年春

贈三位為子

いとをきまはるる心

皇太后皇太后

いとをきまはるる心

建保三年

建保三年

衆議雅經

かすねの雲は雲のとり糸をたひたひとまき風をく

文保三年夏より秋のついでに

民部卿藤

うらひの里に我がすゝ遠路の朝たのむるまや

野々

国光院入道前宮白河院

春のふりては海の朝をたのむるまや

藤原為道朝臣

か海と浪のついでに

文保三年夏より秋のついでに

若中納言為相

玉葉のついでに

野々

光厳寺入道前橋政左衛門

か海と浪のついでに

惠慶法師

か海と浪のついでに

弘安元年冬

若中納言云雄

か海と浪のついでに

貞和二年夏

入道二所親王為相

か海と浪のついでに

藤原於仲叔之家十首あり久遠守る時歌と

源後頼朝作

流りて表の松山にともある海より小やんらたあらん

山階入道前左大臣家十首あり子目松とる事也

前大納言為家

子目より流るあれた飛ぶあは若根の松とありあひ

永保三年内裏子目

後大納言為家

ひまゝかすらんらんひく松らるや文氏のたぬまらん

堀河院百首あり事なり時

大納言為家

子目より二葉の松の文氏がる若宿あらん流り流り外

元年三月内裏十首あり事なり時國書

とる事なり

後照会院入道用白大納言

長竹の世つらえん若宿あらん流り流り外

百首あり事なりとる事なり

若用白

若宿の文氏より出る若宿あらん流り流り外

建武三年内裏十首あり事なり時

若宿の文氏より出る若宿あらん流り流り外

前大納言為家

うらひの若宿あらん流り流り外

貞治二年後醍醐院より百首言を以て対相爲

前大納言爲氏

あはれいのかきもも言年よりかたき言成志ありん
清慎七十七賀屏風并

大中治結宣朝臣

たふあふたのい女言の言とんも言と志成らん

言とらあり

前大納言云任

たのいあふたのい女言の言とんも言と志成らん
三十首言中言中言とらありんも言とらありん
言

花園院御製

うらふのいのかきもも言年よりかたき言成志ありん

若菜言を以て清り 徳倉右大臣

言はすわらふ言はむと志ありん言はむと志ありん
障子の繪く言はす言はむと志ありん言はむと志ありん

郁芳門院御製

あはれいのかきもも言年よりかたき言成志ありん
百首言を以て清り 徳倉右大臣

御製 後光厳院

あはれいのかきもも言年よりかたき言成志ありん
百首言を以て清り 徳倉右大臣

伏見院御製

あはれいのかきもも言年よりかたき言成志ありん

夏よりあきりしははる

藤原為道相

流るる水はあはれきりてはるのたけはるはるはる

しる

くえんあきり

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはるはる

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

しる

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

後山本前左大臣

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

梅のしる

前大納言為家

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

後京極権政家乃六百番子合

宗道法師

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

正治二年後鳥羽院の百番子合

後京極権政家乃六百番子合

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

徳治二年三月廿五日

後宇治院御製

あきりてはるはるはるはるはるはるはるはる

春の芳中り

皇太后交々後成

いあふふふう梅記かす見にくううまう厚うゆ記

文保三年百首をけりとき

中文交々宗母

梅記かす見にくううまう厚うゆ記

六条内大臣

かす見にくううまう厚うゆ記

世首の芳中り

後伏見院御製

かす見にくううまう厚うゆ記

飛山院の梅花をきき行きて書かざるをうら

驚きさあねの梅の白しとゆわくゆわく

月花門院

かす見にくううまう厚うゆ記

性剛は親王家平首をう

市大納言為氏

かす見にくううまう厚うゆ記

市大納言為家とい三首を清治のう時梅花浪雪と

ゆわく事といふあり

深意氏御旨

かす見にくううまう厚うゆ記

伴路大納言并合

いあふふふ

淡きるの美の白よりちり香に木すおの梅とまらひのち

心一と原

凡河内躬恒

梅とまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

清原元輔

香とまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

建長六年後醍醐院一三首方海守のちりてまらふ梅

大宰府師範

神とまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

徳治二年三月松洞寺合ふ

若大細言為世

うらとまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

心一と原

中務卿宗尊親王

梅とまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

法皇御製

春の影にたわくまらふ花とまらふ花とまらふ人

和歌乃枝よりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

中務

乃の影にたわくまらふ花とまらふ花とまらふ人

心一と原

清原元輔

雪の影にたわくまらふ花とまらふ花とまらふ人

心一と原

僧正通昭

花とまらふのちれいりてまらふ花とまらふ花とまらふ人

中納言為棟

春風柳の眉をくまらふとあはれ喜の方を多しゆりゆふ

龜山院御製

春風柳のかげをくまらふとあはれ喜の方を多しゆりゆふ

百景方えまうりつとて柳

入道前太政大臣

さながらの山花うかけをくまらふ喜の方を多し柳のいと

むら

後京極格改前太政大臣

春風の若柳うきく春柳のうらむをくまらふとあはれ喜の方

性助は親王家の中首方

前太納言為棟

河やうき春柳のかげをくまらふとあはれ喜の方を多し

あえ喜の方をくまらふとて柳

法不定為

あゝ露のじよとて竹と春柳の葉をくまらふとあはれ喜の方

柳鷹とてあり 前中納言定家

葉をくまらふとあはれ喜の方をくまらふとあはれ喜の方

文保三年百景方えまうりつとて柳

津守國冬

春風柳のうらむをくまらふとあはれ喜の方を多しゆりゆふ

河津柳のうらむをくまらふとあはれ喜の方を多しゆりゆふ

前中納言國信

春とていふもの定むる所も人相もたせしむるなりあり

元亨元年二月後宮多狭く十号ありてり時あり

心
新大袖之為世

河のまを流るる人か多う此世に世のまを流るる者

鴈返極奉頂小霞とてなるあり

古御門流の製

春とて結うたれゆり人あきなり存もたると

夜湯存
後西園寺入道前大政大臣

あつらふ重宝やゆり存もたるといふなり

物もあつらふたれゆり存の心もあつらふ

田舎

大宮に宿るといふかたなる所もたれ結うたれあり

中院入道存

春とて宿るとなる所もたれ結うたれあり

新藤義雅有

春とて宿るとなる所もたれ結うたれあり

文保元年存

二品法親王光朝

春とて宿るとなる所もたれ結うたれあり

津守國助

春とて宿るとなる所もたれ結うたれあり

徳治二年三月他国あり

贈法三位為子

あけなげを我よりかむに候へば御書にたりのとて平

花方中

前大納言為家

はりけい我がたつ雲にまがれたる後のさう歌を記しより

百をよきそまつりいとおひん

同日左大臣

あきまのふろ横候りより横の折にがゆるしは

真門院二ふまご中より時宗の御書

前大納言為世

あきまのふろ横候りより横の折にがゆるしは

中より時宗の御書

贈入道前大政大臣

あきまのふろ横候りより横の折にがゆるしは

前大納言為世

八十をよきそまつりいとおひん

参議為時

あきまのふろ横候りより横の折にがゆるしは

建武二年由裏あきまの御書

前大納言為定

あきまのふろ横候りより横の折にがゆるしは

百をよきそまつりいとおひん

右大臣

言抄の抄本は上い陰むねのふくえの雲とくちりん

康平三年三月八日家ノ夜色に月とくちりん事

約りふらり 東極前用白太政大臣

月影のふゆきとに極影のとももにわくえをわきぬ

題一 抄本八丸

善見の雲のふく月影とあきけの極のふくちりん

山道赤人

是引のふくちりん夜見のふくちりん我意のやえ

延和三年三月三日湯前極影のふくちりん

口流のふくちりんをきちりんをひらりとちりん

りせくちりんをせりん

天曆抄製

晴るのふくちりんをひらりとちりん

題一 抄 平善威

さるの雲とをわくちりんをひらりとちりん

赤元白雲とちりんをひらりとちりん

白雲のたはらちりんをひらりとちりん

たのふくちりん

大進中将義詮

みらたきとの極影とちりんをひらりとちりん

夏夜時 寺持院殿左大臣

ふり元の初巻の機吟よりあつたはる花よ〜
正中二年七月廿七日首ら魚女のこもむとさうり首
首房はく〜さうり首房時初花といふる事よ〜
法堂り
後醍醐院御製

〜木乃めと春とみ〜り花なるのみ〜
前大納言為世らも結り春日法二十首房中ふ
氏祐の為者

二巻花の歌より外の気もあたらぬ花のあ〜雲
山花と
法印長壽

花のまは〜り〜の山花梅り〜
建仁元年二月後ろ船院又中首房合〜

寐蓮法師

雲をまは〜り〜のまは〜り〜
前大納言經房家方合〜

二条院横波

ゆらゆら花のあ〜り〜
後平範永相合〜

白河院御製

春と〜花や〜り〜と〜
雲相合〜
〜
〜

〜

三教の事も其の本す此の花は不と独り由らふ事の日也

詳し

前大僧正道云

花の事とてふ事今も其の事なり公の御流のたの御

中西書房の命

西園寺入道前太政大臣

その御事とてふ事此の事とていひて流の山にありて

貞和二年百三十一歳に於て

前大細言為定

此の事とていひて流の山にありて

花の事とていひて

新千載和歌集巻第二

春寄下

花園院位に在りしとて此の御執行事の後

七十五歳に在りしとて此の御執行事

依りて御執行事

其の御事とていひて流の山にありて

建保二年二月廿一日御事とていひて流の山にありて

其の御事とていひて流の山にありて

順徳院御執行事

其の御事とていひて流の山にありて

依りて御執行事

其の御事とていひて流の山にありて

正二位為子

九重の白ひかしの櫻をめぐる世のふきとく母なる人
山花といふ事とくまをせけり

後鳥羽院御製

うねる雲井のわが鏡の糸のそよめ花のゆりなほん
花はな

後宇多院御製

わが心も古き花もよほも人様への心鏡の白ひ
徳治二年三月廿四日

正二位隆教 教定

暖流の白ひの橋の糸をえたりをゆりぬ花のゆりなほ
法不覚深目吉祐あく七首言合のゆり時

法眼深兼

相見の指の糸をゆりぬ外山のさくらをゆりなほ
春言中ふ

後思屋和同白左大臣

暖流の白ひをゆりぬ花のゆりなほのゆりなほ
家平首言小花

弾正尹邦看親王

吾国の白ひをゆりぬ花のゆりなほのゆりなほ
建武三年内裏あくをゆりなほのゆりなほ
ちりりゆりなほのゆりなほ

二品法親王光朝

吾国の白ひをゆりぬ花のゆりなほのゆりなほ

後醍醐院天皇いそみそは文とくう時の命令と花

権大納言の

御弟くすまふたごの山椒に花をくさつたのまゝ云

お大納言程房家の命

権大納言の兼宗

お書と改すあひいふに極うそにいふるおたりをいふれ

白きあひいふり

後醍醐院御製

木のりといふかひとそらつちのうらむおのりけ三徳乃とあふ

花のうらむとくう久保のちり中

後三条入彦お大納言

百波のみんじ極あひいふに約さうとせとくうの言則に

宰相中将の侍り此禁中花といふる事とくう

ゆ

民部卿藤

わらわらえいそあひいふに御階のむらゆきとくう

南院のむらゆきをけりたけと後の文は四方

殿上よりいふとち中ふまつとふなりとて一板を

らせんかきとつあひいふにたのせ事ありとくう

後醍醐院御製

お筆のむらゆきをけりたけの文は四方とくう

ゆ

後京極院

そまそまは妙の文は四方とくうは御筆をけりたけとくう

新大納言程房家号合小

岳勢の成家

孝行の跡 雲井の跡を承継し、其の跡に継ぎて、
孫傳目号号号の号号に記

後九条家内大臣

大納言と云ふは、其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

建武三年由家少く、其の跡に継ぎて、

日頃の夕時花

新権僧正雲雅

尚、其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

新大納言と云ふは、其の跡に継ぎて、

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

清人

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

其の跡に継ぎて、

平貞文

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

長治二年四月、其の跡に継ぎて、

権中納言國信

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

其の跡に継ぎて、

大納言右大臣

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

其の跡に継ぎて、其の跡に継ぎて、

其の跡に継ぎて、

侍従為親

山崎より所りなきははるまきとてはるまきの山崎
赤元百首言あまのさるははるまきとてはるまきの山崎

後宇多院御製

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
建長六年三首言あま

後醍醐院御製

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
赤元百首言あまのさるははるまきとてはるまきの山崎

赤大納言俊光

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
花園院御製

花園院御製

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
建仁二年三月初言あまのさるははるまきとてはるまきの山崎

建仁二年三月初言あまのさるははるまきとてはるまきの山崎

赤大納言俊光

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
後二位成實

後二位成實

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
赤大納言俊光

赤大納言俊光

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
文保百首言あまのさるははるまきとてはるまきの山崎

法平定為

山崎の言はれなきははるまきとてはるまきの山崎
白ひらけたりとてはるまきとてはるまきの山崎

前中納言雅孝

晴るる花はたよりよき花をいほしむと云ふらん此花

百首ありし可^花 前用白

しとて我はふらふら花の心はわらわらと云ふらん

花の心は 為道朝臣

恨もわらわら花の本はよそとやそ花を座よりあられ

花易敷といふ事ぞ

如法三寶院入道前内大臣

花の心は花の心は花の心は花の心は花の心は

依託待人と云ふ事ぞ

後白河院大輔

酒より花のたよりよき花をいほしむと云ふらん

権大納言延光の許り花の心はわらわらと云ふらん

小宮れいりあり 後原義孝

花の心は花の心は花の心は花の心は花の心は

権大納言延光

花の心は花の心は花の心は花の心は花の心は

寛治二年百首ありし可^花 冷泉前大臣

花の心は花の心は花の心は花の心は花の心は

大文前大臣家言合し梅

前氣談教長

じりり寒かゝるる入札をめたたなるうゝに苑のちりりん

野々

前大納言為母

とつとつあつたうゝに橋たつむらうらうらうらうらうら

法中長衆

たきなふちのあつたうらうらうらうらうらうらうらうら

光厳孝子入道前橋政左衛門

ゆたかゆたかのあつたうらうらうらうらうらうらうら

津守國助女

あつたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

法印玄性

あつたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

中文大文云宗

みりやまの橋たつむらうらうらうらうらうらうら

為道朝臣

あつたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

前大納言経経

あつたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

後徳大寺左大臣

後徳大寺左大臣

あつたうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

京橋乃涉息不喜日泊り七約り対國乃官三十

一首あらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

あまの雷とつらきまねをうらむとてあまのつらき
のす

木乃のりたの君はあまのつらきまねのつらきあまの
まねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねの

中細言意補

存るに木のたつらきまねをうらむとてあまのつらきまねのつらき
正治二年百首をうらむとてあまのつらきまねのつらきまねのつらき

皇秋門院丹後

とふ人まねをうらむとてあまのつらきまねのつらきまねのつらき
元弘二年詩并余小出春隆

若中細言定家

まねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき

皇太后宮女

あまのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき

伏見院御製

あまのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき
正元百首をうらむとてあまのつらきまねのつらきまねのつらき

六條内大臣

あまのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき
あまのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき

あまのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらきまねのつらき

正三位知家

美登川に流るる水は此の流のりよのよとつここの花のよ

十番書房令

西園寺入道前大臣

春の心錦川に根をたれよとあふれり花のよ浪

赤元百首のよきつらこ花

権中納言云雄

こまやのよまの浪をかへりてよよとあふれり花のよ

源基氏相

源基氏相

清けせよ水のよよとあふれり花のよ

庄の橋せりやゆくとあふれり花のよ

前大臣正親源

あふれりやゆくとあふれり花のよ

すまのよよとあふれり花のよ

瑞子内親王つらこ

瑞子内親王

さつきのよよとあふれり花のよ

やよよのよよとあふれり

瑞子内親王

あふれりやゆくとあふれり花のよ

元年三年八月十六日秋後やあふれり花のよ

あふれり花のよ

民間のよ友

あふれり花のよやあふれり花のよ

百首花のよよとあふれり春月

入道二所親王法守

善為安のたひにけりかなあかきものあはれはゆかたをえん
前大納言為定

うごころとわのまの志おとく事と白く春の東雲月
六百番号合
あ中納言定家

木茂りて白敷くも白ひくは紅色のこゝろまはれあつた
後二条院御製
群

喜喜たなひく昔ふかむつたり君よりとく一尊入るよ
元亨三年八月十八日親王とさうりて白き芳澤
まのせう雨奠 前大納言為世

小田のからくわ水と花をてのこめつ世とまをせえを
性助は親王にみす首よりえはゆつた所
津守國助

世にその村よのまをえはゆつた所とまを列したく桂那
津守國道

あなをたなれを座へは山吹のうらなふけや村よはをえ
百景をきりて時難を

水産をよほしをよそへ山吹の花乃とて年浪とそを
前田大治

和元三年百景をきりて時難を
後照念院用白太政大臣

善為安のたひにけりかなあかきものあはれはゆかたをえん

善為安のたひにけりかなあかきものあはれはゆかたをえん

子自書言今一 大僧正慈法

三つりたれどもあつた海守すはあつたか致たりなり
親應元年三月三日言海せはつ時此上義とい
ゆる事とらませ新言り

法皇御製

と記す所の河の杉かあつた記といふこと池のうへ海
延和御時苑香舎友喜よりあつ

藤原教行御記

友乃の風河杉あつたむと記の雲たあつたあ布あ
記一決 友人あつた

吾る所の友あつたひたあ終いなりあつたの杉りかあつた

達智門院

ひたあ終いなりあつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり
文保御言あつたひたあ終いなり

后三位宣子

ひたあ終いなりあつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり
百首あつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり

御製

教へつたの記あつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり
大細言御実母

あつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり
自教あつたひたあ終いなりあつたひたあ終いなり

貞和二年四月五日

前大細言為定

根のゆるりうすすといふく花を新しき^其もきよき

天徳三年内裏手合

中納言朝忠

花をよきとてしるすきあはれとてかきしるす

正治三年百首あきりのきよき

皇太后文太皇太后

いづるのきよきとてしるすきあはれとてかきしるす

あはれとてかきしるす

新子載和歌集巻第三

夏歌

百首あきりしるす

花園院御製

きよきとてしるすきあはれとてかきしるす

文保百首あきりしるす

六条内大臣

たけのこもよきとてしるすきあはれとてかきしるす

百首あきりしるす

前大納言朝顯

あきりしるすきあはれとてかきしるす

文保百首考をまうりしに

前大納言為定

春ふてそふぬさかづかき衣見いたすれ絲夏にさしり

夏衣中

後二位宣子

たれさけりむる者杉さき子さきたりくまはさきり

院御製

何とくま染じりふとを極言は指ふさきり

写月日部さたりけりさき行なり

後醍醐院御製

あのみ袖をさふりと他約さきさきあめ部さ

たけりさきさき行なり

後京極院

あめたり月さきりあめさき海とさきりさきり

部

仁智二お法親王守光

部さき山さきりさきりさきりさきり

三十首詩中し里河るとさきりさきり

さきり

法皇御製

いとさきりさきり部さきりさきりさきり

文保百首考をまうりしに

後光厳院御製

玉川のさきりさきりさきりさきり

部さきりさきりさきり

今出川前右大臣

名月殿のまへに玉藻のまへにまはるるまへにけふ卯辰

年一原

ふんくす

今月辰のまへにまはるるまへの里にまはるる卯辰

中務卿宗尊親王

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

前中務卿宗尊親王

卯辰

前中務卿宗尊親王

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

前中務卿宗尊親王

前中務卿宗尊親王

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

貞和二年百首言あまのこ

等持院殿左大臣

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

百首言あまのこ

進子内親王

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

文保四年百首言あまのこ

津守国冬

卯辰のまへにまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

賀茂社にまはるる卯辰のまへにまはるる卯辰

源邦長朝臣

のたりふたの世に時をうたふ定ぬる者たまはる也
郭よりとて清り 藤原為遠朝臣

ちては世を創者なり福の世に風うらぐれぬの如くは源

後二条院御製

御書より我光をたれ時多しよりまはるとえさうみ法
我のぬかへ海ちりり郭二年よりまはるとえさうみ法

権僧正源守

は世に風うらぐれぬの如くは源

和久細言為家

あふんふとて源郭二年月におのの者たまはる也

後鳥羽院御製

枯鶴あのみあふんとて源郭二年月におのの者たまはる也

中宮大支子宗

よのつゆえいとて思ひ神のあふんふとて源郭二年

百景あふりてとて源郭二年

権中納言為時

時をうたふ世に時をうたふ定ぬる者たまはる也

津の園あふんとて源郭二年

権国法師

郭よりとて源郭二年

源

権的親王

約とての家もさうし可なり申す教と王様と鳴り

中納言家持

枯竹よりたるとなり教と我より神さくらりかひあは

聖文天皇

ありまにさかして可なりあつて神言をよき候も

文保百首言書けり時

後照念院用日太政大臣

鳴りえたりかして都去去とあまさるる者なる候

前大納言為世よませ侍りる書り結二十首言書

法眼約

きり結入るかひあまのきり結さるる都共今候も

後宇多院南院院よりまうりたり不園部と

と事とむあくらませさ路行るふりさるり言

元盛法師

まうり言とありそり可なりあつる者候なりん

後醍醐院よりみまは文とやう可なりとむとさる

百首言書り候けりにかり

後中納言具行

かひさるりありそり可なりあつる者候なりん

元亨元年正月法皇御院十首言書り候なりん

今言とさくらりそり可なりあつる者候なりん

氏部公為教

可為その流るるの心くをりりすたる者たる人

平一休

入道二所親王姓助

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

正徳二年百三十一歳

前大納言隆房

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

平春時朝臣

平春時朝臣

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

中務卿宗兼親王家自是より

正三位重氏

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

元亨三年九月盡日内裏より其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

前大納言実教

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

花園院御製

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

遠部七とありて可為の心くをりりすたる者たる人

先の孝子入道前橋政房

其の終極の心ありて可為の心くをりりすたる者たる人

前大納言為世ら申付り喜り給事合國部を

祝部成久

あふもあそわられし時多かりし様くうそいすらん

性助法親王家又十首うふ

お系次雅有

ふ里の友とだてて部古かりぬおのとて流り給らん

永業六年夏上并合上郭と

六條右大臣

うら孫あわあ人可名たうくけふ又とさしあ

夏子中し

前大僧正桓守

里つたかりしとてれ部とまらん人おたのし給らん

平維貞納言

あそくそつ世風うらあそ給らんこめたる秋もは給らん

氏部公為藤

あれあかりしつらふ時多拍たのころの聲は給らん

嘉元二年夏上并合上郭と

前大納言為相

子孫もわたり給事なめくふふむあめその

白きあめさつ井くはたのし

市製

ひらぬ世の月とあふあふいとそと給事給らん

嘉元四年夏上并合上郭と

前大納言為世

明和三年八月廿一日

夏三月

衣笠前内大臣

部古新まのあらやふの五國のゆゑをうゑしん

百五十九のえんをいしん

後醍醐院御製

氏乃の河ありぬとりのうもあそくも田子あそく

文保二年八月常盤井他國の幸の時今迄

よりて方はつらまづりつらふ子苗とあり

後光厳院御製

と我くこゝに氏乃の苗とあり物たのむつらむ

百五十九のえんをいしん

土御門院御製

水ふた早苗のえんをいしん

とあり

法承定為

むろせ河ありぬとりのうもあそくも田子あそく

百五十九のえんをいしん

後醍醐院御製

神乃もたつらむとりのうもあそくも田子あそく

前中納言定家とあり

信房のえんをいしん

法承定為

志のりいせいのかゝるふとありぬとりのうもあそく

正平二年白首言きけり時

権中納言云雄

橋の小汲ひもろや恋の朝ふらぬか又たなごん

夏もあきもまづり〜と云ふ橋

等持院殿左大臣

袖ふけむり此後を思ふ〜と我もみま〜の朝のしらむ

道前大臣改大臣

袖ふけ〜地もゆも〜と云ふもあれむ〜と白たれむ

建武三年内裏ふく〜と云ふもさうり〜と云ふもあれむ

まづり〜時橋

今右内大臣云々

ゆき風ふ〜と梅も〜と云ふもむ〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜

貞和二年白首言きけり時

後三条前内大臣實家

あはれとめてむ〜と云ふも家の内吹つ〜と云ふ朝のたりぬ

〜と云ふ

後白河院所製

橋は花の宿〜と云ふもあはれとめてむ〜と云ふも〜と云ふも〜

守覚法親王家中首言ふ

前中納言定家

た〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜

〜と云ふ

平忠盛朝臣

あ〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜と云ふも〜

前大臣納言為兼

酒を飲まふりぬる事有るの事あるはあはれなる事

明徳院の製

青島の雲井たるに都を月ありて暮るけあつらん
口と口を又しし年之何る折乃あやめたる事あり

僧正通昭

青島をたてた地をたてて夜は静と山ありしころ

久人あつす

かきつりたる青島をたてて暮るけあつらん

百をあきとすりしころ

入道親王とん巻

青島をたてた地をたてて夜は静と山ありしころ

松の山

中勢の宗号親王

病ふたふとていひて宗号親王のころ

洞院橋の家百とあり

藤原門院の将

青島の津島の事とていひて宗号親王のころ

文保三年百とありしころ

芬臨利花院前宮白内大臣

水心池の事とていひて宗号親王のころ

小島百とありしころ 土浦門内大臣

は井つたのころとありてむすあつらん

野

藤原基任

たう執着の未だありて成りたりとて其の儘のまゝある

前僧正朝

則ち此の如くありて成りたりとて其の儘のまゝある

持中納言云雄

有りて水海よりありて成りたりとて其の儘のまゝある

建武二年由雲よりありて成りたりとて其の儘のまゝある

よりありて成りたりとて其の儘のまゝある

ありて成りたりとて其の儘のまゝある

有りて成りたりとて其の儘のまゝある

右大臣

有りて成りたりとて其の儘のまゝある

正治二年百々芳吉の如く記

藤原隆信朝臣

有りて成りたりとて其の儘のまゝある

百々芳吉の如く記

義次雅經

有りて成りたりとて其の儘のまゝある

百々芳吉の如く記

前大僧正道玄

有りて成りたりとて其の儘のまゝある

元亨三年八月十八日奉旨ありて成りたりとて其の儘のまゝある

夏月

後醍醐天皇御製

泉川に流るる月の影を移して流るる中と云

白首のそとまろり河部云

入道お大政大臣

河部をとりはるる^{移す}と云う事にもうたをいふはつと云

部吉部吉と云事と

初大納言為世

よりふら移すのうと河部が流るる月をいふ事あり

部吉部

津守因助

よりするさ月の光をあびつらるる影をいふ事あり

後中院前大政大臣

棒ちり入るる月の影をいふ事あり

権中納言俊忠

夏の影をいふ事あり

うらるる影のこころをいふ事あり

伏見院内製

と云う事あり

夏をいふ事あり

大納言歌言母

秋ふそとをいふ事あり

秋元白雲をいふ事あり

後宮内院内製

くらひる玉をいふ事あり

群一〇

藤原門院少将

此の百一十のたれひはかたけりかけらふまじあや堂かたは
康永元年六月に河内へく三宮を海に於て討た
堂と云ふ事とつゝはしりては

権大納言言夏

并橋へのたれひは洋のてまそそかたのたれとたりん

群一〇

津守國冬

かたけりは作給はる藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原
昭訓門院少将

藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原
百一十のたれはるは藤原のたれはるは藤原

左近中将義詮

夜半におとあけくは是れはたれはるは藤原のたれはるは藤原
三條院のたれはるは藤原のたれはるは藤原

群一〇

この夏のたれはるは藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原
文保百一十のたれはるは藤原のたれはるは藤原

三條入道前大臣大政大臣

里とてはるは藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原
群一〇

淑安門院

移りてはるは藤原のたれはるは藤原のたれはるは藤原
性助は親王家の首方

新大納言為氏

大納言のつとむる所かりあるは流りてあるを以て流る能く
文保曰く是より時

新大納言為氏

三河守の命は月影のころを居るゆりみり
樹陰夏月といふ事とて中世新言

伏見院御製

冬この雲はつづの影をえ木の影ゆかたの影月
初元二年伏見院二十首新言けり夏月

好照念院用白大納言

流るるの場とて流るる事とて流るる事とて流るる事

元亨三年八月十五夜後宇多院五月二十夜
はつ時わりの事 新大納言為氏

あやと流るる事とて流るる事とて流るる事
百首新言の事 二首は新五首流

流るる事とて流るる事とて流るる事
流り流るる事 為道新言

流るる事とて流るる事とて流るる事
後醍醐院御製時武吉而して流るる事
流るる事とて流るる事 平氏村

流るる事とて流るる事とて流るる事
流るる事とて流るる事とて流るる事
百首新言の事とて流るる事とて流るる事

開白左大臣

夜衣すくたらぬ定條の形ひ此山の松若志とせ
文保三年内裏福言令林平佐趣といふ事
と
後二位新家

九重の遊ばる御所風さきくすく起勢からせ
年一決 人丸

ひすあなのいしとせえはたの志う記志あはれ
中務

下ふ水枯えかりしむき泉のまはし
祝部新親

山一乃井の山常なる目ひすくあはれ海の水

前中納言送房家の弁命と納涼

らん一決

大井のまゝ夜たうすくいおせきた枯やうりてさうん
年一決 伏見院御製

まゝ記り海のまゝかけてるは後より此御製
元弘三年立派定屏風より月後すう市

後鳥羽院前宮白左大臣

みそ記りまゝ記りなすくいおせきた枯やうりてさうん
文保四年より前

前大納言為定

及くもやい海のまゝ記りなすくいおせきた枯やうりてさうん

寛治二年百五十五ヶり時六日後

皇太后御交々後成也

及て此すのあさる等祭のたひくよりこのあさる

かゝる秋風

新千載和歌集巻第廿

秋哥上

旭の日向よりせける心

延喜御製

あそをあるより秋葉の秋少く風の音もよそ原に

院御製

ゆりあつたふれゆく其竹の一本乃より小秋をきたる

少くもあはれと葉あくるまをせける雨を秋津

晴のよそ事と 法皇御製

かゝる秋風のもやむいささかちり秋やよみん

正和元年八月十五夜秋の首言海をけりて秋相と

いなり事とらまを竹宮

後伏見院御製

と物あまけたりとす地風来とも也秋の志はあま

群一頃

らえん〜子

物ま〜此は風吹神の志すき衣を添〜りりり

石法如社二十首方小初秋露

正三位知家

こよのわらあまけの志は神の志え我あつき秋の志

又露とらる事と夜露帯内大臣

新法如の志は志は神の志と此〜りりり

是貞親王家御合

躬恒

ら〜秋の志は志と我とわら〜とこれ法如

群一頃

中納言家持

あ〜露の志は志は神の志と我とわら〜とこれ法如

曾孫好忠

そ〜ぬら玉ふらあ〜人秋の志は志と我とわら〜とこれ法如

建武三年の志は志と我とわら〜とこれ法如

う〜まのりらる露 彈正平邦有親王

露はす下草方これ揚麻の志は志と我とわら〜とこれ法如

秋の志は志

後三位藤子

映じ〜る風りのやそ〜るれり志は志と我とわら〜とこれ法如

夏之季時秋 前大納言為定

またも新式舞のまゝ風引のめつたゆらん

心 後東極坊政前太政大臣

舞の舞のまゝかゝるく舞のまの席より結をそく

百々あそびまわりのこと記す

前内大臣

たふらつゆの座よりかゝりそく舞のまの席より

権中納言定頼のまゝかゝるく舞のまの席より

そく舞のまの席よりかゝるく舞のまの席より

大貳三位

かたまりのまの席よりかゝるく舞のまの席より

心 前大納言資若

かたまりのまの席よりかゝるく舞のまの席より

貞和二年七月七日三々あそびのまの席より

そく舞のまの席より

法皇御製

林とてい年のわたりとてい舞のまの席より

心 後伏見院御製

約わつて終つて心舞のまの席より

元徳二年七月七日因書久三首あそびのまの席より

七々舞のまの席より

前中納言云猶

わきまはたし使わらるるはれいりしりしり勢のり

七又無とらあり 津守国道

天川如とちけりしとまは業やけりひりしりの橋をたは

百とちありしと記せり

入道前太政大臣

馬のりとの意家ととも玉のりともはらりありるる

元亨元年の月廿六日飛上殿中くう殿のり

勢とらりしとありしとまのりしとまのりしとまのり

ち務新守り 後守多後清繁

七又たてあかえりと秋の七日廿月廿八日

記しし 大細言經信

と京のりしりしりしりしりの星屋よりしり書たりしり

中細言家持

天河東よりしりしりしりしりしりしりしりしり

紀友則

あはれ河原しりしりしりしりしりしりしりしりしり

元徳二年七月七日七首奇海せしりしりしりしり

事しりしりしりしりしりしりしりしりしり

花園院御製

ふけわらりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

七又無

天川河原の勢しりしりしりしりしりしりしりしり

神一

左京大進源仲

七女あり此若母ありて結内婚くまのふありて
文保二年七月七日内裏より討方と命れ奉り
七女地後といふ事也

氏部公為友

源河の水上いさこしとありて源とてと河とて思
文永八年七月七日白河原より討方と命れ奉り
此よりまうりつらつ井く小七女也

後醍醐院御製

かほりて神ありて夫のありてはしりてかほりての橋
七女ありて
後西園寺入道若大政大臣

的ありて河原たりたりありのありてはしりての橋
正中二年百々ありてありて

若大細言御製

三女ありてはしりてはしりてはしりてはしりて
神一
後伏見院御製

七女ありてはしりてはしりてはしりてはしりて
正中細言御製

織女ありてはしりてはしりてはしりてはしりて
正安三年内裏より七女ありてはしりてはしりて

後三位為理

七女ありてはしりてはしりてはしりてはしりて

文保百首をよきけりとい

法平定為

七人の従ひたしやゆきんをけしきりし

正安三年七月七日首首ありし言ふ

後二条院御製

不流のたふしとありし月夜ありし屋

和泉式部

和泉式部

年あふまるとすまひのまのまのま

建永十三年七月七日首首子院殿上

和泉式部

わさくといふひのまのまのまのま

和泉式部

和泉式部

落しとまのまのまのまのま

和泉式部

和泉式部

映じとまのまのまのまのま

和泉式部

和泉式部

和泉式部

和泉式部

和泉式部

和泉式部

凡そぬ勢の床を敷きこむ月影さひし深草のゆき

貞和天皇御成す時

前中納言雅孝

清和天皇の志を承けつゝ之を感ずるに神なき所の

野原

乃道朝臣

とてかみ神やともぬけを流する始末をいひしゆ

道法法師

夕暮れ流しをいひ流する秋の阿まれの所をいひし

法平定為

露やをむらじゆ流する神の流をきこぬ秋の夕暮

後田光院前関白大臣

うらむらたあけの夕暮始をいひし流する所を

貞和天皇御成す時

前大納言為定

とひらぬむらじゆをいひし流する所をいひし

弘安天皇御成す時 二おはれ親王覚助

鳥のむらじゆをいひし流する所をいひし

永仁天皇御成す時 前首領合小僧不持

後花園院内大臣

あまのむらじゆをいひし流する所をいひし

野原

前中納言有忠

いふむらじゆをいひし流する所をいひし

百葉歌えまつりて秋夕

言道法親王

時多わたりとなく秋のひびきかけたるは秋夕

秋夕中ふ

権中細言云雄

あそびのわたりとなく秋のひびきかけたるは秋夕

位にたまりて二年の秋の夕のひびきかけたるは秋夕

時たつて秋の夕のひびきかけたるは秋夕

朱雀院の製

年とて大文のつら秋の夕のひびきかけたるは秋夕

鳥の歌あそび山家草花といふは秋夕

後醍醐院の製

いなり七草の秋夕の歌は秋夕の歌

百葉歌えまつりて秋夕 権大細言云後

藤原の神といふは秋夕の歌

秋元百葉歌えまつりて秋夕

照法三位太子

秋夕の歌は秋夕の歌

元弘二年立后宣旨

権大細言云教

いなり七草の秋夕の歌

建武二年内裏あそびの秋夕

まつりて秋夕

彈正尹邦有親王

落ちて朽へし物と交末たりとあゝの病り悔を吹

貞和二年夏三すめきけり時

左兵衛督直義

病けりふ事吹く情風をよそよそよとゆき花の色を

平一吹

前中納言匡房

たふさかこをたけまじりてふり袖に花の影

廣義門院

病けりさ事のみは初めけあせをすけり花の色

元亨三年七月内裏あくらの世たとも三首あ

はくすけりまら時朝草花

後山幸前左大臣

物とつら道の花をゆかきくさけり秋の

野草花とる事とらる

大納言師賢

あゝ病けりさ事のみは初めけあせをすけり花の色

寛和元年八月十日内裏あかきあけり

藤原惟成

病けりさ事のみは初めけあせをすけり花の色

建保六年九月十三日三首あけり時秋野

とらる事とらる事 順徳院御製

あゝ病けりさ事のみは初めけあせをすけり花の色

建治二年九月十三日内裏ふくまき言傳せし時
山月と云ふ事と 後西園寺入道前太政大臣

足利の山月瑞きくを于てを成たしと云ふは山月歌
元亨三年後之冬後山月卒首言をけり山月

民部卿為友

あひまの山月た成りありあつたのうをいすあり山月歌
曆應三年八月又終首言がせしは山月
山月をう事と云ふ事なり

法皇御製

雲の山月の山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
元亨三年七月内裏ふくまき言傳せし時

山月初月

侍従為親

山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

伏見院御製

山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

中宮大支云宗

山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

前大僧正慈勝

山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
山月を山月と云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり

有厚感親法

望之乃乃のそと流るるり山の端なるる流る月うけ

平貞時朝臣

晴る夜荒らすそくあそ此松よりたたく出る月うけ

前大細言為連家言夏言あうそけり時

惟宗光吉朝臣

雲よりたのふたむと出初くみよりの空よりそく月影

権中細言經定家言合し月

大慈卿約宗

そくたふりの空よりそく月影そく津波の流る月うけ

建長二年八月支取る御承り此月とそく

謙言親言あうそく月影

冷泉前太政大臣

池水よりそく月影そくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

ねりき三年八月支取る御承り此月とそく

そくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

前大細言為氏

月影よりそく月影そくそくそくそくそくそくそくそくそく

駒草乃言そくそくそくそくそく

花園院御製

昔そくそくそくそくそくそくそくそくそくそくそく

夏言そくそくそく

前大細言為定

わきあ系すあ玖を電とぬりむくし月の影みお
赤元百とありしをい治りたゆい

後宇多院御製

枯の空にありし月も河をなみく我世とくは影たむ

年一六

後醍醐院御製

くも風きたぬとみるも枯の影は月もつえふとあり

建武三年八月とありて千首言はくゆつり

は井くにい月

そこの心もわらうとありんをいふもあ枯の影は

年一六

権中納言長家

冬この月もあ風を枯の影と人のあつとをいふとあり

夏もあつとありつ井くにい月

御製

任われ代り昔はあつと志けし屋とく雲の上は月

弘安六年八月十八日内裏おく月とあり海せま

年一六

大藏卿隆博

波風もたまはれ代り雲の上は月とありそ月とあり

赤元百とありしをい治りたゆい

一条内大臣

く枯もあつとあり海せまこの志けし屋とく雲の上は月

元亨三年七月内裏おく三首言はせられたる所

初秋月と云ふ事と云へば「猶」云々の事なり

大納言卿賢

夏の上り月と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

秋分の中
左近大将冬通

わきつけきみなり秋の月と云へば「秋」云々の事なり

中宮権亮と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

為道朝臣

いさむらぎと云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

殿上ゆきと云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

あふ
大宰大貳重家

つばきと云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

秋分

源基成朝臣

位と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

内小きと云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

源忠朝臣

善いとも云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

秋分の中

京極前用自家肥後

うた秋と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

寛元二年九月十三日西園寺入道前大政大臣兼

右近将軍と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

常陸井入道前大政大臣

か秋と云ふ事と云へば「秋」云々の事なり

正平二年百景寄書付時

後照念院園白太政大臣

夏より夏までの間に書きたる紙をたてておぼしめすは六月のけ

夏より夏までの間に

檀中納言為時

吹くに秋のまのあまはむいふ山ありすあはれ月をけ

前中納言定資家の侍方合之山居月影の事

と

前中納言季雄

雲を渡る朝の山は枯風とふけく木すあはれ月影の事

永仁元年後之冬院二十景より一景の枯風と云

不題と竹てつとまづりて云

津守國助

ちぬく雲は夜を月影とて秋をぬく枯風と云

秋

津守國助

月影はあつとあつと雲をぬく枯風と云

前大僧正實超

山を渡る朝の山は枯風とふけく木すあはれ月をけ

龜山院法親

かほくもやあつとあつと月影をけぬく枯風と云

順徳院法親

冬このまの雲はたつとあつと月影をけぬく枯風と云

月影はあつとあつと

前泰次為實

吹く松を名にし月を照らすはく時をさす松の松を

日新行風

後乃相法文由也

其の行の榮をく月也えはりの雲とく松風

お僧正道性

長竹の葉を此家よあそとれ月もなき松を

久基首を言ふ

皇天信交支後成

秋の月をあひしはひつる松はく松を

初元二年八月十五夜後宮多後月十五夜海

世々時

前大納言為世

あつ松と知る松の松はく松を

花園院持の松殿よりつせおしゆはく松はく

まじとてまじりて松の松はく松はく

まじりて松の松はく松はく

と松はく松はく

な松はく松はく松はく

百景を言ふ松はく

藤原為遠相也

月をくあつ松の松はく松はく

前大僧正道性松はく

松の松はく

深草氏相也

く松はく松はく松はく

百是言當時 入道前大政大臣

秋月行ありきと云はらるるに其の影を云は

前大納言程原

と云ふは其の源と云はれし神小座とて月と云ふ

年一頃

後西園寺入道前大政大臣

神ありて其の影を云はらるるに其の影を云は

困る事と云はらるる事と云ふ也

後伏見院御製

漢茅原と云ふは其の影を云はらるるに其の影を云は

弘安六年八月十八日内裏ありて其の影を云は

空あり 前大納言云為魚

と云ふは其の影を云はらるるに其の影を云は

年一頃 大い貞重

と云ふは其の影を云はらるるに其の影を云は

曆應三年八月十八日支那松田河ありて其の影を云は

其の時月ありて其の影を云はらるるに其の影を云は

前大納言云蔭

たはれやありて其の影を云はらるるに其の影を云は

法皇御製

未と云ふは其の影を云はらるるに其の影を云は

實治百首ありて其の影を云はらるるに其の影を云は

鷹司院御

ひきつりては是はなほうとも家と未とる所の月夜を

群

後三位氏久

まゝもて我あそ月夜をうけしむる神と露を

平貞時朝臣

うて移の月夜をひき移りて後とのうて月夜をう

丹波尚長朝臣

移てに月夜をうて移りてのうて移りてのうて

後一人

三日月の月夜をうて移りてのうて移りてのうて

後二位朝臣

泉河川の海と云ふは

約とひつりては是はなほうとも家と未とる所の月夜を

元亨三年八月

後三位朝臣

大井河川の月夜をうて移りてのうて移りてのうて

中務卿宗尊親王家朝臣

宣和時朝臣

前大納言為世

秋の月夜をうて移りてのうて移りてのうて

文永七年八月

前大納言為世

秋の月夜をうて移りてのうて移りてのうて

文永七年八月

山本入道前太政大臣

その海の花あはれ海月の味上りすある秋の折月
百を方えまうりと此月

左近中将義経

伴路の海花あはれと此月の影をきく此諸方りはれ
若大細言を氏すものゆかり玉津清社三首を合

傳月

源親長卿

此月まやとうる月の影をうらむる海の花極を
此月

津守國量

此月の花あはれとて名も知れしとて月影を
後二位の家

あまの海の花あはれとて月影をうらむる

伏見院御製

あまの海の花あはれとて月影をうらむる
今月十を方えまうりと此海月を

西園寺入道前太政大臣

留名月影のあはれとて月影をうらむる
あまの海の花あはれとて月影をうらむる

五稜院

此月の花あはれとて月影をうらむる
此月

津守國道

あまの海の花あはれとて月影をうらむる

津吉國助

任君のあき津水と影みせたるあつ月と弟とあつ

源信の朝臣

枯の葉のあつとあつ月と影みせたるあつ月と弟とあつ

一丸

と京を思ひてあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

伴路

とあつとあつ月のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

和舞のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

後鳥羽院の製

とあつとあつ月のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

後醍醐院のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

一丸

侍臣の製

とあつとあつ月のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

とあつとあつ月のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

前大納言の製

とあつとあつ月のあつとあつ月のあつとあつ月と弟とあつ

とあつ

新千載和歌集卷第五

秋寄下

秋寄下

後三條院御製

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

後三條院御製

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

伏見院御製

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

貞和二年百首寄寄 秋寄下

前大納言云藤

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

後三條院御製

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

後三條院御製

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

前大納言云世

秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下 秋寄下

題不知

指天袖云云

鳥のたのむはまはすはたも新んてや麻乃あゝん
津守國助すあはらる位吉社あ合と遠國麻云
事と

法眼廣融

松風のたりふつけくあはれりたのたろくまはれん

始平中より

鎌倉右大臣

あまの常たりくしとくく座す此とけし麻乃あ

祝部成國

まはれあまの子しむたに書とめて霧のまらひま

文保三年夏より

奉陪利花院前園内大臣

初形あまらうらとくあまめくまはれり下し麻のたろく

年一頃

常陸井入道前大臣

たろくあまらうらとくあまめくまはれり下し麻のたろく

建保二年秋より

僧正行意

まはれあまらうらとくあまめくまはれり下し麻のたろく

元弘三年夏より

指中袖云云

秋の風かりかあはれり下し麻のたろく

子文書あ合

後京極権政前大臣

まはれあまらうらとくあまめくまはれり下し麻のたろく

年々

天台座主相家

唐土の山田の事許りしを指染りしは秋のしる

大江高廣

秋のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

前大細云為兼

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

夏より秋田

前大細云為定

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

文保夏より秋田

前大細云為定

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

建長五年八月仙洞ゆく遠近初唐と云事許り

前大細云為定

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

前大細云為定

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

元亨三年立派屏向唐

前大細云為定

山田のしる唐土の山田の事許りしは秋のしる

永仁元年八月支那唐土の山田の事許りしは秋のしる

時秋唐

前大細云為定

ゆきとていふ我の如く枯木のやまと約とて川原のよ
後醍醐院々の文とていつの時か首言合とて初尾

お中納言隆長

月とてあつたの如く枯木の上とて川原のよ

枯木の中に なる雅歌

この如く物けの如くあつたのよとて川原のよ

山階入道初太大臣家十とて初尾とて

て川原のよ 三条入道田太臣

の如くあつたの如くあつたのよとて川原のよ

大正宗秀

明かした枯の如くあつたのよとて川原のよ

永福門院

あつたの如くあつたのよとて川原のよ

貞和二年百とて川原のよ

無部隆朝

あつたの如くあつたのよとて川原のよ

初尾言為とて川原のよ

法平隆剛

あつたの如くあつたのよとて川原のよ

初尾言為

あつたの如くあつたのよとて川原のよ

中務卿宗尊親王

らりてありしとてききく露霜のさしきりて松中の秋
出於松林といふらん心とてしをせ竹竹

伏見院御製

たの書の思ふはまこととて丸くしのせかれり出乃秋か
群一六

後西園寺入道前太政大臣

霜花のまこととて原のきりくとて川すのこふる丸くらん

進子内親王

秋の心もききとて養ふ秋あたるるよとのきこゆか
散原光俊朝臣任者秋少とて今に世をききき

竹竹

後三位朝臣

きりて秋まことのわきりあはれ志は原秋著わら

曉月園出といふらん事とて秋

前大納言為世

実の心も露の原よりとてじりり秋の月あはれ
秋元とて年後の秋は白き方をけり何月

正三位隆教

秋の長月の秋は秋風とて川秋とてしとある月け
元亨二年八月十六日秋月とてききき

氏部卿為藤

秋のきききとて秋の心とてたて秋きき月影を
文永二年九月十三日秋仙洞とてききき

山階入右前左大臣

久世乃あきとる月の桂川秋のしらべのなまかなる色は
赤元内裏白の衣をけりて記眺望也

後醍醐天皇御白太政大臣

七の月の海守に新そくへ海守とて御ありつる

雨後月とて事也

皇太后御衣太支後成

吹くぬあけの村を眺むるころこけはあけの月

子夏白鳥の衣 衆議雅經

かほりきたる秋のそらにわが心はひびく五の月

元亨三年九月盡日内裏又首衣と眺月也

前中納言季雄

霜とる後芽の衣にかけをきて衣をこたりあけの月

家とてそそきあけの月

後醍醐天皇御衣

長月の五の月の秋のそらにわが心はひびく五の月

弾正平邦有親王家平首衣と眺衣

長河法師

秋の衣きたきまのそらにわが心はひびく五の月

赤元内裏白の衣をけりて記眺望也

昭慶院一茶

秋の衣きたきまのそらにわが心はひびく五の月

前中納言為相すあけの月とて眺望也

平新時

浦のちかて極くじ里あまのいふゆきとてなるん
海邊橋衣とらる

藤原宗泰

ちかちか神の海風をけせいかえともあまや衣らん
群々
為道相と

河の衣をのたらしすまじ月をそあひまきの時人
西山の草れいかりやくらる

蓮生法師

月影の枯る衣をに成ぬを誰かよとて昔のあらそ
弘安元年百を衣をけり時

梅宗は清平

さひらけ衣をかきりて七月の衣とてなるん也
橋衣とらる

及からん清芽のふ川衣と衣と衣と衣と衣と

指作心良

ふらの衣を枯の家乃なき衣のたすまへ津と衣
兼之元年由書衣合し同橋衣といふ事と

後之我太政大臣

おん衣の衣の家とら儀と袖ぬふ衣と清芽生衣宿
赤元百を衣とら橋衣

万秋門院

我ふきく疎ゆもやうりたてわらぬとあふあふ

野々

法印覚徳

かゝる川と秋を也馬うん霜にたきわら秋の里へ

治暦元年九月家おく晴間擣衣といふ事と禰

竹々

土浦門右大臣 師房

松えり人のかえりあふ衣子之を也さえうりぬとん

元亨元年九月内裏あく今とささうりておぼ

まつりける時秋擣衣と

氏乃為藤

いふく秋を也とく秋の擣衣はひくく川衣ふ

百と方えまつりてと擣衣

前用白

ちく秋のかさの里に秋風とく川り衣も也とく川

弘安元年九月晝日春宮あく三首方おせぬ

時秋山曙

前大納言為氏

ゆきしらおのせいひひてまきまのわら春の秋音

元亨元年九月晝日内裏あく三首方擣衣と

時暮間晴月とるなる事とほくまつりて

前大納言言教

うらひ秋のあふ音たさく不秋影とて川ありぬ

百と方ありてと擣衣とく秋田といふ事と

言

後三条院の製

月乃海門田乃有海のさき

群一決

前中納言定資家

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

永仁元年八月支那後宇多院十首海世

祝新成賢

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

永仁元年八月支那後宇多院十首海世

秋浦

大慈心隆博

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

夏方元まつり一時席

入道親王覺範

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

群一決

中勢心具平親王

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

人丸

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

康保三年内裏方合の時萬乃の秋の著いさき

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

人丸

折少の著いさきし海河の秋の秋の川海

長元二年十月上東門院乃合菊

うゑんちんかむをあらぬ長月ひのたりとさけり白菊乃花

河原院ありて露光宿菊といふ事也

かきくにけりかきとある菊の花をとりてあやむ

弘安七年九月廿七日院に羅菊露光寺といふ事

とがせられしう不伴にけりしう時をせけり

後宇多院御製

文久二年三月の羅菊の白をとりて花のりつとさけり

前大納言為兼

村中系羅菊の白をとりて花のりつとさけり

文保三年夏月をとりてけり

村中納言言仁

りつりあはれとてまてる露のりつりけり菊のりつり

長月也といふ事とてりつり白とてけり

とてけり

後宇多院御製

りつりあはれとてまてる露のりつりけり菊のりつり

寛政元年九月廿七日院に羅菊露光寺といふ事

村中納言言仁

りつりあはれとてまてる露のりつりけり菊のりつり

弘安七年九月廿七日院に羅菊露光寺といふ事

とがせられしう不伴にけりしう時をせけり

けり

依見院御製

白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

神...

式部院清運

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

前右兵衛督基顯

時を以て是を以て嘆くや...

お大納言名世

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

お大納言名世

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

終極對菊と云...

徳大寺元大信

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

終極對菊と云...

徳大寺元大信

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

永福門院

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

貞和二年百...

入道三浦親王法身

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

神...

源頼貞

又白雲の麓に終れり此の巻やと云神の...

梅窓使云致

かたはつし國の廣くはつし海に舟をこぎて

法平幸法

と経典を抄りておのづからをてつむすべし

二和法親王寛孝

露とたはつてつるもつら時をくはりて抄ひてを屋

猶子内親王治承の初なり抄ひてつる目録をけり

定法入道兼用白太政大臣

あけつる言はれぬ筆をみるに系松のりややまき社務

延喜

永福門院

結言のむしつる筆よりぬまきをこゝに記すのり系

源重之

この書のためはつし記す筆の長はつしと誰かをせり

好忠

おしかりて筆はつて冬も冬もふらふのりあきぬ

貞和二年百三十九のり

中之大支云宗母

娘の心も冬もつらふをてあきぬのり系

弘長二年後醍醐院より十のりあきぬの時記す

前大細云為家

とみり筆もつらふをて三箇條のりあきぬのり系

延喜

已心後前橋政方大臣

御用ひつるつらふのりあきぬのり系

建武二年のむすむすりて千首言はくまらり
と記秋植物の事とる世竹言り

後醍醐院御製

御田の草花御申たれ松どのうてなむら
百首言はれしは井くは紅葉

御製

秋の多きしつら紅葉たれたてぬきしつら
れりしやと 権大納言忠季

雲のえき雲のおきくをぬかふか井あつこ
危く殿千首言り

後宇多院御製

春のあもたれあわしむら 権のよのひ

建武二年の雲言合

大蔵卿有家

大井はあはれ権のしり葉のひりあ
文保百首言あけり時

三条入道前太政大臣

紅葉のいろよ葉のきつる川がせぬあ
百首言の中に木回紅葉なる事

前大納言為長

高のむらけ木回りみとらとら
建長二年仙洞詩言合とる中秋真

とくふりて本茶の枯葉とあらわくのはせむの月
紅梅の香とてしよませ竹のう

後漢院御製

いそふふ茶のあけ神のひみむらのこねあはれ
建武三年へむとこりて子首言はくまのうらつ
そと枯梅のこころ半とよませ竹のう

後漢院御製

竹葉とて此茶のあけしと出下とて梅のこねあ
かあとの枯とあつと自れぞはくこころ何あつ

堆高親王

介とてこの茶はひひくわりのよさきひ

前大納言為兼兼

あつと茶のうらつとてゆとつと梅のこねあ

板原宗徳

あつとこの茶はひひくわりのよさきひ

元正三年三右衛門守一紅葉

藤原為冬朝臣

とてあはれ茶はひひくわりのよさきひ

平一原

前大納言為兼

あつとこの茶はひひくわりのよさきひ

夏とてあはれ茶はひひくわりのよさきひ

菩提院殿左大臣

藤原朝臣と云ふ事也

藤原朝臣

ある事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

紀貫之

文保元年の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

藤原朝臣

藤原朝臣の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

藤原朝臣

藤原朝臣の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

藤原朝臣

藤原朝臣の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

藤原朝臣

藤原朝臣の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

藤原朝臣

藤原朝臣の事なりしに藤原のいふ事はうけつたる事なり

前中納言為相

明和より下りて其後少人江榮れ中より下りて其後少人江榮れ
正徳元年九月の比江榮れとありて内より下りて其後少人江榮れ

遊義門院

其後少人江榮れとありて内より下りて其後少人江榮れ
口江

後二条院御製

凡そ其の御製不詳とて其の御製少くも其の御製
中院入道左大臣家言合とありて其の御製少くも其の御製

神祇伯頼仲

本より下りて其の御製少くも其の御製少くも其の御製
少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

西園寺入道前大臣大信

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

保清兼頼仲

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製
寛政元年其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

後二位家隆

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製
弘安元年其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

龜山院御製

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製
寛政元年其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

孝親并入道前大臣大信

其の御製少くも其の御製少くも其の御製少くも其の御製

校とるの浪とを深川に架すの下とる山の麓乃白糸

三十とるのまを新の中より

伏見院御製

さきひゆまふあしとるる作の紅葉枯らさぬ

秋の横の命

後名神流の巻

木枯す吹風のりあふ深ぬ色と身にいふみもの

野々原

元補

花す紅葉の夜涼さあせと枯らさぬ物産

白雲寺の対の月書

左近中将義隆

三津定らふとるの紅葉のりあふ深ぬ色と身にいふみもの

紅葉

平政村相伝

紅葉のりあふ深ぬ色と身にいふみもの

貞和二年夏冬あめりあめり

正三位隆教

紅葉のりあふ深ぬ色と身にいふみもの

九月書乃号とるありあり

大徳の有家

紅葉のりあふ深ぬ色と身にいふみもの

かふらふる人

新千載和歌集卷第六

冬昇

平二年七月廿七日内裏少人冠をさうりて首
首を流しよりりうと記初冬のみ記

初大納言為世

若たむ指をさへぬ風と物もさけそをきかた

記

順徳院御製

若たむ指をさへぬ風と物もさけそをきかた

中又自書有命

土御門内大臣

時多と記ありて身は神宮月三幅の松は松のみ記

寛和二年殿上昇命

くえん

初河内少少の堂にありてまじふをたえのおあえ

記

丸

河内少少の堂にありてまじふをたえのおあえ

元年元年七月三日首昇命時雨

後宇多院御製

初河内少少の堂にありてまじふをたえのおあえ

冬は中

後鳥羽院御製

初河内少少の堂にありてまじふをたえのおあえ

相模

初河内少少の堂にありてまじふをたえのおあえ

建保二年(西暦1110年)の時

前中納言定家

少将の位に任ぜられた

時

坂原隆祐朝臣

神皇正統記の記述に

お系次が嗣

少将の位に任ぜられた

元弘三年(西暦1133年)

侍従が親

少将の位に任ぜられた

貞和二年(西暦1132年)

前大納言経顕

少将の位に任ぜられた

時

持律師守

少将の位に任ぜられた

後白河院一条

少将の位に任ぜられた

祝部成久

少将の位に任ぜられた

元亨三年(西暦1131年)

時

坂原隆祐朝臣

少将の位に任ぜられた

輝

源清氏朝臣

高下を結ぶたか心耐るうま本榮つりまをたかみん
初元百を言まけりこ此初冬

前大納言後定

深はと山のみまはまをあらを居まると冬は本
元亨元年十月八日没す多後の三言言者藤原
とらるる

前中納言後忠

海より家まひあり山麓のりまるとらるる
近衛院時義人平合ふまのりまるとらるる

刑部卿範兼

初榮ちつたり此山ゆかり綿々として志望は流

正法皇孫中

武子内親王

神子月むら此山の山下にむらむらむらむら
飛山殿おくら下落葉とらるる半流るる

彈正平光忠

昭慶院の幸ありて言合約らるる
昭慶院の幸ありて言合約らるる

太宰府世良親王

木れりふれ此の紅葉とらるる
初冬紅葉とらるる事と

法平長兼

今海にまみり晴むらむらむらむらむら

河原の歌よのちら歌よれうきよのちら歌よ

友原基任

けの家のよすきよじりる本築時くき海内流

純登法師

りうらる本築かやまぬん校しこまぬのきふ

前大納言良教

お筆を吹もそいゆあしうかよのたあといはるり

後京極院

吹さふゆのあしとたたくてまのうしとせむん

霜裡落葉とらふ事と

式部卿之助親王

庭の河、枯のたえん流つる本築、たへ原のたえん

貞和二年夏、言あふれ時

入道二親王、言園

ふのたのせうやうのうに枯、葉もむいふらん

霜よらう

庭ちり、庭、流、葉生、風、け、枯、葉、まじ、り、葉、分、飛

源兼氏朝臣

ふもからふたがあつてふかきこふたのちら葉のちら葉のちら葉の思

建保六年、言、月、康、申、秋、言、言、冬、夕

如願法師

葉のちらふたがあつてふかきこふたのちら葉のちら葉のちら葉の思

百三十一 元亨元年 内寒草

拾大御言實後

暖の言は積りかゝるはく我もそこの庭の萩と

元弘三年 春 后 定 屏 風 下 寒 草 あり 初

二品は親王家道

よのつらゆらと藤も我もそこの庭の萩と

等持院殿 左大臣家 并 藤 霜

惟宗 亮 之 朝 臣

藤の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

都 大 江 廣 房

朝の萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

性助は親王家 平首 弁小

希大御言為意

萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

冬 萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

後二条院 御

萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

後宇多院 御

萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

元亨元年 冬 萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

民部卿 為 意

萩の葉 涼山下 風 涼しく 萩の朝 萩の葉

佛名の菊花と云らじとて多岐竹宮

冷泉院御製

枯のて露界にゆく菊を河さあつるあつりて十色

貞治二年夏皇太后の御時御製

藤原信實御製

じやうとてわさりの花を花の冬にたつとては

建仁三年和歌の御時御製

屏風

皇太后定太子後成女

花とて屋よりあつるを冬にたつとては

冬屋中ふ

津守國助

あつる木葉を花にたつとては

前大僧正道昭

ふり花の御時とては

後二条院御製

花とては

貞和二年夏皇太后の御時

入道前大政大臣

月夜に花をたつとては

御時

後鳥羽院御製

とて花の御時とては

貞和二年夏皇太后の御時

前大納言為定

るまに舞方りそあから老の末のあひかえり
群〜

雲のうの老のあけり日けりさるる
元弘三年春后厚肉の五節

文のこよあは白け草たりとさけい
中宮大実云宗

少けりおあひの袖はゆえ日けの糸と
群〜

天のたあはゆえとあさるる人
終始の沛幸の時りまは行り

白河院沛製

松の何映るのさるるあや
文保百とあさける時

吹方漢のまの極風一けの子鳥あ
三糸入道市大政大臣

後千載集に入て作らるるあ
源宗氏

いかにとたえぬわあはゆえり
群〜

あはれあひむかあはゆえり
今よ首とあさるる次千鳥と

御製

ありて代の流るる海子より我君とわたり和方浦を

前大僧正賢俊

和方浦の文海子より立ちり心とせりあきり晴あり

和方浦より和方浦の十賀なるを和方の原より

且秋門院丹後

きりらけり心とて友千鳥共座のきりし御製あり

元亨三年十一月廿三日後宇多院十首和方浦

和方浦子鳥 和方細言云雄

友千鳥とわたりし和方浦なるを和方浦とて

和方 和方雲祥

和方和方とて和方其心と里のありて和方

又和方重

和方和方の心とて和方其心と里のありて和方

和方和方重 和方重

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

和方和方重

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

和方和方重とて和方其心と里のありて和方

長生堂に在りて書きたる海のかんらん子らの文を
宣和二年夏に書かれり終り

後醍醐院御製

その地は水が深き水多うも毛の類といふらん
野々原

為道朝臣

水とすも水は深き水多うも毛の類といふらん
信專法師

信專法師

水とすも水は深き水多うも毛の類といふらん
百首奇文まつりしと記水島

田大信 海相公

水とすも水は深き水多うも毛の類といふらん

元弘三年立石堂の屏風御代ありし

前大僧正覚園

のともよびをいふる人哉そのやまを海に渡す世々

百首奇文まつり 梅谷使實継

たりのまのつらふ系つらなれを思ふにむとまのつら

任者いふまをけり三首奇文まつり海

深草氏朝臣

那岐の地は深き水多うも毛の類といふらん

冬言中

光厳天皇入道前橋院天皇

たらの海は深き水多うも毛の類といふらん

前大僧正深惠

伴路のあすはひるをのまをみる人極平のこいお終つて

鴨治夏

さこの目も何とあはるるをさあはるるのよはるるの系

文保元年三月廿九日

三條入道前大臣右大臣

吹らるる風をひらりてとてさすけりてさすけりてさすけりて

お元目も何とあはるるをさあはるるのよはるるの系

昭慶門院一条

小藤原よりおはるるの系結とてさすけりてさすけりて

延暦元年

伏見院御製

と朝のあすはひるをのまをみる人極平のこいお終つて

藤原雅朝御製

長行のあすはひるをのまをみる人極平のこいお終つて

元弘三年三月廿九日

前大納言右大臣

さこの目も何とあはるるをさあはるるのよはるるの系

人さすけりてさすけりてさすけりて

後三条院御製

吹らるる風をひらりてとてさすけりてさすけりて

延暦元年

永福門院

さこの目も何とあはるるをさあはるるのよはるるの系

百首言よりさすけりて

花園院御製

ひしひしと雪の音を聞きて月影みくもれはるる
夕月映雪とて事なり

前朱雀院御製

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

後花園院御製

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

御製

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

後醍醐院御製

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

後醍醐院御製

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

権僧正慈傳

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

権僧正道我

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

板上市則

夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり
夕月映雪とて事なり

前系改修清

ふんむつたをたけむるたかひの原とて海のたけむる

也

深義約

踏まけん急不のたけむるたかひの原とて海のたけむる

龜山殿千首ありて書

前大納言實教

我よりまゝにたけむるたかひの原とて海のたけむる

也

堀河院中宮上総

たけむるたかひの原とて海のたけむるたかひの原とて海のたけむる

権大納言忠季

たけむるたかひの原とて海のたけむるたかひの原とて海のたけむる

正中首を奇きけり時

二品法親王定助

冬あつた昔のたけむるたかひの原とて海のたけむる

元年三年分付の書あつた昔のたけむるたかひの原とて海のたけむる

奇きけりたけむるたかひの原とて海のたけむる

梅窓使云敏

花をみれば花のたけむるたかひの原とて海のたけむる

冬あつた昔の

前大納言俊定

たけむるたかひの原とて海のたけむるたかひの原とて海のたけむる

花をみれば花のたけむるたかひの原とて海のたけむる

法不定為

みよりの昔のむすきと自願の君よりなるわすのかぶ

群一原

坂原重徳

矢田殿の浅茅をきき君城よりわりの殿より浮雲

百三首書一町書

等持院殿左大臣

阿ちよわさるをわらふりより矢田殿をけくさるる白書

文保百三首書けり時

中宮大友三宗母

きぬのふらつゝまぬのりじ南宮のたのむ言さるる君

貞和百三首書けり時

梅家使資的

くちのむねの志書の暇よりて成るる神のさしけさ

文保二の八月書懸井他同約筆の町人むすきと見

あつゝとさしけりつらに鷹狩よりあり

前九共清徳教定

けだの尾上と隆のさしけりいふさつと見えなるる人

百三首書一町書のしと

権大細之志季

すし書に飛ぶをあらうりつ書にあらぬ書は浮雲と見

入道前大政大臣

ちり書のおろき給る者にさるかりとすめゆき給るる

群一原

志原親王

かりのたか殿のさるる君のうりよかるるさるる人

文保百首奇事けりといふ

津守國冬

く齋於寺の鏡けとんてと成山なるの社をわ明くん

群一原

らんくーら次

有りすかりとれ志水之初の世の世を野寺の鏡方うん

元弘三年皇后宮天慶風り一唐持すう所

前中納言三福

持らば多きの唐とく言あすきとちの社をわ明くん

群一原

前原約柄

かりとすすれ志の原何きく想さ電り色あ色うち

祝成成久

くねり年ととよといわつりあて起とれい色男にいまり筆

前大納言云蔭

雲中一當の年とあすまははれつりて起とならるの

前権佐正玄園

くねり年ととよといわつりあて起とれい色男にいまり筆

百首奇事けりといふ

等持院贈左大臣

起乃坂をわぬととれ養をぬもそく終る重なる

老後成書といふ事とらあり

法平禪隆

おめとと年ふちき志の波たりをわつて年を書あ

前大信正範画

ふみ海にたゆみ年とせはるくくすもさむの浪を呼ぶ

文保百首をよむ時

後照念院宮白太政大臣

都波のなる海に年とせはるくくすもさむの浪を呼ぶ

年とせ

後二位家隆

花とまの春とせはるくくすもさむの浪を呼ぶ

みづの野の原

新千載和歌集卷第七

離別并

命婦乳母とてはるくくすもさむの浪を呼ぶ

上東門院

かほ乳母とてはるくくすもさむの浪を呼ぶ

加賀乳母とてはるくくすもさむの浪を呼ぶ

園麩院御製

あさき方とてはるくくすもさむの浪を呼ぶ

朱雀院御製

あさきの火よりとてはるくくすもさむの浪を呼ぶ

はるくくすもさむの浪を呼ぶ

権中納言教志

らうけにたのむらと恋の志は事とすれりなり
とらふふ愛はるるの事いひもあつらうり

和歌部

わがれはく記とたつとちとさあつかけをいふあは
阿の女のかとこがりのふまはと縁之國とすれりなり
いしつらうり

深道海

わが身もははるるまをさし世中とありうき物な
いと志のひくがらひらるあはれと愛はるるのてふり
かみせはるるふりしつらうり

源徳云

きくへ屋らわらぬの志とあてたらけいふふまを
人の物するをさるるふりてふらりてふりつらうり

貫之

あつてわらぬをたむをさるる方とあつたるなり
かたはきに或れつらうりてふらりあつたる世に
りやと格のたふとあつたるかたつたつらうり

法成寺入道希格俊成

希格のやまは露をくはるるあつたりの風をぬる
也

紀式部

かたはきに格ふあつたる事とあつたる海の家はかた
拍りつらうりてあつたるつらうり

中務

吾の事務もさう願ふ事あるがたう風をさうせん
夏より言ふ心記離別

崇徳院御製

松の浪たりのもよもよとて雲を舟の浦へ 舟をさる
有るの如くもよもよの如くわがなりてさるる不飲た
たるる

九条右大臣

さけなれ松をよせたる原よりと年々かきてさるるあはれ
まろしゆまるといふと祭とよ年々たはらふ

伏見院御製

秋の川もさるるあはれとてよもよもよの秋をあらふ

陸奥よりさるる時あたぬをよむの許りある
つよよとて秋の月をよむとてさるるあはれ

藤原實方朝臣

あはれ人勢のさるる月も下るる色は我海をよむ
さるる藤原殿よりとてのたるといふ秋をあらふ
すけかものほひつらつらとてさるるあはれ
口相見るといふれとあけんとてさるるあはれ
それやとて内さるるあはれとてさるるあはれ

前大納言云々

秋の川もさるるあはれとてよもよもよの秋をあらふ
長月よりさるるあはれとてさるるあはれ

法成寺入道前官自是政官

王公よりからふ教の法は決らざるのわざは朽すはる

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

いかり 後三位為継 遠

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

常陸國守りなり いかり

紀宗基朝臣

なめどかといはけりあつたのころよりけり母のこゝろにまもりて

二月一日あつたの中いかり

稚子内親王家紀伴

存ひやいふころいかりなりあつたのころよりけり母のこゝろにまもりて

大江資朝臣いかりなりあつたのころよりけり母のこゝろにまもりて

純因法師

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

藤原宗遠

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

権中納言具弘

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

あつたのころよりけり母のこゝろにまもりて曉るを以て

親玄法師

いさよとむらひあはるるも人座の此後ふさせとまらぬの事
漢の國あり座より示しよる人座の此後ふさせとまらぬの事
まことまことかたむのゆかりいさよ

友原雅題

尋らばあつる人のつとまはまことまことまことまこと
彼中國よりつとまのゆかりいさよ

三善資連

なほいさよまことまことまことまことまことまこと
あつるゆかりいさよ

藤原法親

しあつるゆかりいさよのちからあつるゆかりいさよ

あつるゆかりいさよのちからあつるゆかりいさよ

藤原法親

あつるゆかりいさよのちからあつるゆかりいさよ

あつるゆかりいさよ

新千載和歌集卷第八

羅接舟

七

貫之

王河うま子舟の神とま向するぬまのこひ舟もかた
文永八年七月七日白河殿おとくへむとま向して
はくちまのりつる波に接泊の心とまをせ行り

後醍醐院御製

風おきまの迫心の波とま友らひむかひるがれ船

海路のちかえりまをせ行る

後伏見院御製

海も風もまのたあまの舟のこゝろあやうき海はま

東三条院石のまのせ行りなほ九月つらりの
月舟あかかきをせ行りなほ舟のこゝろあやうき

一条院御製

りあか波うらりうら白波の枯とまをせ行る

入唐の村あり 成尋法師

あゝ海とまをせ行るはの舟のこゝろあやうきの神と

舟のこゝろあやうき 源頼基

と風もまのこゝろあやうき舟のこゝろあやうきの神と

正治二年夏よりけり 羅接

隆信朝臣

松浦のこゝろあやうき舟のこゝろあやうきの神と

夏より一月

前大僧正賢俊

之を禪する家の浦に... 竹生... 有久日吉社... 御ひつ... 法平定宗

瓊子内親王家海部

津守国量

河... 津守国量

法平宗眼

淨阿法師

於... 浪... 霧中... 前大納言為氏

前大納言為氏

振... 志元...

野後三位為子

... 持僧正覺信

行とまうらう一打けきおねの雲はなほ一若れはるのり

如雄法師

東海の家をたぬらふあそむるをなすかむるはるん
みればあまのうらなつ時空をあそびたり白河雲をい
はくそとくは神のけきさるるあそむるあそむる
とまは法師のたぬるの基の不見とあひひきよれて

澄空上人

光臺にみえりはるるはるるはるるはるるはるるはるる
後醍醐院時武吉而くまうらひはるる原露とく
ふそとくはるるはるるはるるはるるはるるはるる

源知約

いづら成かすははるる山端の端はるるはるるはるる

建仁元年十首をきける時野経月

前中納言定家

めづるわびの月は初末をきくはるるはるるはるる

建仁元年

後三位为理

弟花の梅のからむ日すわとむむむむむむむむむむ

友厚雅家

そそあめあめをくいとむむむむむむむむむむむむむむ
家詩奇合約をう時野経月秋の事と

前中納言定資

むむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ

群々

道命法師

在りては、いかにいかに流るるれ、極其なるれ
世作のひくさぬか、いとほひておぼえは、
此の國の老庫の梅を、いと書にゆかりとまかり
そふふ、その書と、いと書にゆかりとまかり
馬か、いとゆかりと、いと書にゆかりとまかり
月、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり
ゆかりと、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり

格中細言為的母

月、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり

群々

入道三品親王等

われは、いかにいかに流るるれ、極其なるれ

源基氏朝臣

格中、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり

道楷法師

そふふ、その書と、いと書にゆかりとまかり

大江宗秀

あえ、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり

志元百三十五

格中細言云雄

格中、いと書にゆかりと、いと書にゆかりとまかり

群々

津守國助

後世の事も言ふべき物なれば、さあはる御代も言

貞和御代も言ふべきなり

前大細言為定

その事なれば、御代も言ふべきなり

世に言はれし御代も言ふべきなり

と云ふ事

右厚雅朝の言

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

後世の事も言ふべき

指大細言云也

の事も言ふべき御代も言ふべきなり

中宮大ま云第一

と云ふ事も言ふべき御代も言ふべきなり

後伏見院御代

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

二つは親王御代

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

祝部御代

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

おのれも言ふべき

坂原御代

おのれも言ふべき御代も言ふべきなり

述懐の奇るく伝言の中り

藤原基任

玉うけ二をまもり成りたりあけらば松の歌せりま

鞍中い

深兼昌

秋の聲に座よりとれ養ひて神の志にのり

坂原泰宗

ひらき野はらの末とあはれと程里と成りし松

蓮生法師

石垣まのあはれ河原よりいれみかしの湯にやま

正治二年夏秋の様

惟の親王

若神の山の幸いよかきあすりなうりし松

群

土御門院

河のやまを流りてたけりさかきらるる神の御

お系決定宗

誰ふも座よりとれまらりよきあはれいあふく

秋のやりの松きり村をいあふく

坂原約朝

あはれいあはれかきりたりし山若春の御

あはれいあはれかきりたりし山若春の御

法眼約海

越のあはれいあはれかきりたりし山若春の御

大孝修乃の時久延行なり

二品法親王學助

言かたしとて其等と云ふことの御世はたゆむるを待

換り言とて譲り 津守國助

あらし山阿とては心儀もたぬて一室をたよす所の教の君

大江茂重

雷つとては甲斐の志を秘とていふてはるゝにゆゑに

鎌倉右大臣

東流のまれば中流とていふてはるゝにゆゑに

その中よりいふて

信生法師

あまのりよむかひの極りんとて母とよけぬる衆の中

源頼康

杉の影をいふて海にたらし移りある母とていふて

後法性寺入道希玄白石大住持の所家より言ふ

久延行まゝの様のうゝ

皇太后宮大史俊成

見ぬの葉のまゝとてかきおきとてはるゝにゆゑに

前中納言定家

唯ちの爲度よりいふていふていふていふて

正治二年自是言まける時様

前大納言忠良

わ〜信た子の雲をかくきく後路とて細く別三
弘長元年百首をきけり付たり〜也

亦大納言為家

於て〜日教たる婦人神と云ふことありき

そらのけりきし

新千載和歌集巻第九

釋教哥

天王寺いほしとて二諦の法文かく百首あり〜付たり

中ノ

亦大僧正慈法

いふ〜いひかゝりたりた〜ら成すといふ〜と成す〜ら

又教の哥とて〜あり

入道二品親王法守

空道三のさひ〜海らひえたりき眠のさめぬ〜さ

亦先百首をきけり〜付たり〜也

隆覚法親王

ふのた〜る〜さひ〜は〜さひ〜けり〜め〜は〜ら〜あ〜ぬ〜さ

赤元百首をきける時様のみと

後西園寺入道前大政存

その社名をなまけと法の内ひきまの物あらうなり

平一決

後伏見院御製

とくまらばあつのはらひにせしむるたふひなり

久人一決

由らあつち世の家ととらねを海と法の内ひあ

久安百首をきける時天教

藤原清輔朝臣

常の子孫のたふとあらんは神の成とをきけ

一切衆生悉有佛性なりと

深有長朝臣

いそがしち冬あそりまの草と木とをけりてはけり

法花經抄御本の心とあり

前大僧正言題

今こそあつちのころれ中とせまきりありはのたのた

菩提心即ち白淨信心義也

持僧正道我

みうた雲と花とをゆりあゆりてはけりまきりあれ

藥王不廣宣流布なりと

法不空性

山様あつちの風とゆりてをたふさうなりとあり

前大納言為家因是は眼深兼生海島の心
てし中せ仍きり言中に花用者天下皆春らふ事と

前大納言為母

咲きしつ法のよしのむとそ言方乃本末の喜しむれ
禪林春朝花色自惜執念

照法三位為子

わし吹雪の林の初りけ花とま風と世いふれ川
釋号二代の説教と河難乃結集竹つ事とふひ

権少僧於寛贈

権少僧の林はるんとやはらしと此榮をらひと此
園覚ちあく佛事の意と此のちる成んく

前系袂雅有

夏風を言ふたぬとわ沙りくはのひらくを教く
大園院智也

くまの心花のけらるま中鏡心の水は浪をうそ
千首前らませ竹まらに鏡像と

後宇多院御製

中寺鏡の心花をなまにありとみろくを海とたりんれ
有為報佛言中持果とのるらむと成

前大僧正桓守

中流鏡みるまてし流の影も竹むらひのまをあり
宿命通の教なり

了性上人

いそいで世をわたりしつゝ人の後をひきし由りて
後二条院かきせしむるの法がわが法に法に法に
たまはくはつと七日光の真言はとつてせしむる
一書りて

前大僧正禪助

あつた光の秘のまの法をすすめしむるの法に

物にせし

西花門院

さきより名跡をとりしつゝ後ありしつゝの法に法に法に

天教の法中

前大僧正忠源

本乃す此の法に法に法に法に法に法に法に法に

前大僧正頼仲

いそいで世をわたりしつゝ人の後をひきし由りて

法平定懐

さきより名跡をとりしつゝ後ありしつゝの法に法に法に

西園寺内大臣女

いそいで世をわたりしつゝ人の後をひきし由りて

昌義法師

いそいで世をわたりしつゝ人の後をひきし由りて

信解おれん

藤原宗秀

いそいで世をわたりしつゝ人の後をひきし由りて

天教の法中

惠真上人

梅くものわらわりの得えあろふ御の海くひを
うたのたはたともむむさうりく言はらまうり言ふ
は井くいに卒未といふりこと成らまむ路り

伏見院の製

海くひをり心の未くひをきえこと成らまうり
唯識論の心くうりもゆり

後三位為理

心くひをり心くひをり心くひをり心くひをり
執通計不執唯慮身起都無解用の心

前大僧正覺實

尋思路施^施とみむさうり本れありのけり海くひを

尋思路施^施名言語道新唯真智者自内不證の

心

持性心取通

心くひをり心くひをり心くひをり心くひをり

心

只敏法

心くひをり心くひをり心くひをり心くひをり

心

入道二不執王法守

心くひをり心くひをり心くひをり心くひをり

貞和二年夏

寺持院殿左大臣

心くひをり心くひをり心くひをり心くひをり

還歸本理一念三千の心

ある向うに世をうづ月の光をえりてふらんてとていふ
元亨二年八月又秋月事と云ふに

二品法親王受勅

そとにうじある科の此座すそへんは海河の月
止観法義乃ほりえんはけりけり

前大細言為家

鶴乃山のみ月とたのびる年を法乃出さの記

法平成運

と秋たこの月ち記らん鶴乃山のを記す
法務寛信のこりけりけり

藤原基俊

月影のさゆり山へおきけりたてし藤をえねふ

寄月天教といふ事也

法印宗昂

いふあるは月のすえんていふのやとていふある

三鴻社に本地の若考とけりめいと記くらんてき

左兵衛督直義

くさうりて記海ふいとていふは月と記すを

難法三位為子ありてはるんと記すはるの

うとひりては法親王といふかきえを

とていふと表波の橋ふりてはるに二巻は

氏部々為友

流るるわが身をわけて出せよなつかすじ月をみろ

群一〇

前大信正道玄

むし雲とあはれをわけていそいで月をみろ

金剛經を新しめ

源和茂

とちりたれはひと推してつらや心の月をみろ

群一〇

藤原基世女

むし雲とあはれをわけていそいで月をみろ

松風と真実の友と 朗月と誦習の縁と

後約なり

高弁上人

宵月すじよをぬのやまに解脫の門に松風をみろ

はなれをみろあつさうとみろ

慶政上人

少き雲の雨にひらきし月をみろ

執心をもはなしてはなれ

前大信正宗伴

那をみろの雲をわけていそいで月をみろ

群一〇

快子内親王

とちりたれはひと推してつらや心の月をみろ

止観不二指智真二のあり

持律師良寛

空をみろ海をみろ

天教也

前大徳正慈慶

淳化元年八月十五日... 元年三月八月十五日... 淳化元年八月十五日... 淳化元年八月十五日...

後宮多院淨教

那... 前大徳正慈慶... 淳化元年八月十五日... 淳化元年八月十五日...

入道二所親王号因

たて世の... 親像の... 耀堂上人

親像

淳化元年八月十五日... 淳化元年八月十五日... 淳化元年八月十五日...

国光後入道前園日太政大臣

一... 其有得因彼佛名号... 為得大利即是具足无上功德...

前大徳云為氏

一... 無身毒... 淳化元年八月十五日...

淳化元年八月十五日

淳化元年八月十五日... 淳化元年八月十五日...

群一休

如堂上人

物に及ぶるに非ざるにうとありたりとあるをり

六茶入道前大政大臣

たのむにわたりて月を折みけりさきには物の中をけり

寄月大教といふ事也

入道二品親王性助

物の中をわたりて月を折みけりさきには物の中をけり

群一休

淨阿法師

とありけり下りては雲乃をわたりて月を折みけり

深堂

むすぶるに非ざるにうとありたりとあるをり

各當年 産業花集待我 瀾海同行人といふ事也

漸堂上人

たのむにわたりて月を折みけりさきには物の中をけり

てありけり下りては雲乃をわたりて月を折みけり

上善人俱會一處乃といふ事也

法不定者

たのむにわたりて月を折みけりさきには物の中をけり

如來淨花正覺苑化生の心也

法眼幻海

たのむにわたりて月を折みけりさきには物の中をけり

家のまへに法師といふ事也

流くひれとせられむえの念のえむ
かじまを海にわらひをせむすひつら

和泉式部

名もたれむさきとある物とてやまの海に流る

年々次

徽安門院

そのむすよの海にわらむとすむ佛のちひむす
無量壽經我建起世願といふ事と

深邦長朝臣

世小のちひの海にわらむとすむ海にわらむとすむ
神林式のと氣とむす年八首より九首の神樂
舟にさかぬとわすの定実の波とわらむとすむ

事と

前大納言為家

いふ又ちひの海にわらむとすむ海にわらむとすむ
百葉乃と氣とむす年八首より九首の神樂
といふ事と

花園院御製

いふ又ちひの海にわらむとすむ海にわらむとすむ
年々次

法下雲祿

ねの宮の若川と舟のたれたれとせむとすむ
友原京總

おん千らたりとせむとすむ舟のたれたれとせむとすむ
氏部と為友一回の結縁の供養とすむ時無量壽
經十劫徳也と

大江廣房

まろのころ時喜助の言に

入道二不親王言曰

つらあまのしゆき春物たりのとて中あまのしゆき

飛山殿七百を言ふ不偷盜戒の言

前大徳言為定

ゆくの心を言ふ原かるといふそをたしむるの言

安樂の言不説他人好悪長短

持信言云曰

うしとくかたふん部故とてゆすしあまのしゆき

普門の言著於本人の言

前大徳言為世

あまのしゆきを言ふたの言なりんかたふんあまのしゆき

廿八の言ふん部故とてゆすしあまのしゆき

公案院高念

ゆの言かたふんあまのしゆきなりんかたふんあまのしゆき

一流の言首なる言事なりんかたふんあまのしゆき

前大徳言為勝

ふんたりの言ふん部故とてゆすしあまのしゆき

持信言云曰 大信心忠性

うしとくの言ふん部故とてゆすしあまのしゆき

前大徳言為道言

あまのしゆきを言ふたの言なりんかたふんあまのしゆき

又自是子ありてなり

法中成運

浪の心衣のうきまきそをせいのふあはれをむくうらら
建武二年の裏あはれをむくうららて子首言はれ
まうり言の所述懐

入道二所親王の園

今より見るとのむくまきあはれをむくうらら

舞

舞真法師

あはれをむくうららてむくうららてむくうらら

六条院宣旨

竹乃葉のかけ一衣のあはれをむくうらら

天台座主桓嘉

雲のうららむくうららむくうららむくうらら

鳥胤上人

雲のうららむくうららむくうららむくうらら

後二位家隆十女侍のうららむくうららむくうらら

心より見るとのむくうらら

西園寺入道前大臣大治

雲のうららむくうららむくうららむくうらら

十界のうららむくうららむくうららむくうらら

武部公武の親王

子成のうららむくうららむくうららむくうらら

古道は親王に法王授けまつりまつり時々の徳なり

法王栄運

忘るべき法王の徳は人の徳に比ぶるべきはな
清水の如く清く静かに法王の徳は人の徳に
比ぶるべきはな

紫式部

心ゆくもかたはる所の徳は人の徳に比ぶるべきはな

伴路天輔

心ゆくもかたはる所の徳は人の徳に比ぶるべきはな
百年三寶藏此徳住百年といふ事也

覚空上人

たけなす徳もあつらん義人の徳もあつらん法王の徳もあつらん

二品法親王寛尊

かげもはる地もあつらん法王の徳もあつらん

中務卿宗尊親王

清く静かに法王の徳は人の徳に比ぶるべきはな

暁の電

新千載和歌集卷第十

神祇系

龜山殿七百五十一年野々

後宇多院御製

酒をたけ民のかまを此輝きく酒とりをすんまゝの^まあ
建春門院御歌 社まのや好きうふらう此集歌

の中へ後約りり

ちとやう車程のねと空ふをい記しきまはたがたうめ
くふ首をよめえれらるるなり神祇

後二條院御製

ちとやう神のまことい記しきまはたがたうめ

野々

順徳院御製

いふまに目録のかつらり也い記しきまはたがたうめ
後京極攝政家百五十一

前中納言定家

神代より奏あつてわあ井とすれら衣若衣とたうん
冬神祇といなる事とらやせ行宮り

伏見院御製

天乃不れあまむむいよはしきえ神代よりを朝々のま
文保貞言あけりいさ

法平定為

三魂のひらき時^らの草牙^牙や神の七代のもろあなるん

百々言めされり時

後醍醐院御製

あまのたのめしむ何んかきく神代かきく此方かきく

神代書中

二品法親王慈道

て原あきく岩戸神話のひいさくろあせふをまはせ

建武二年の雲千首あきく冬雜物とく冠をたて

うきえきけり

藤原成徳

あまの原あきく神代より中をきくまはくと神代

神代書

中法祐親

あまの原あきく神代より中をきくまはくと神代

神代の初りく月とまはくとあり

葛木田氏忠

我あまの神代ゆきとあきくよりあきくまはくと神代

神代書

葛木田氏之

いづれゆきとあきく神代ゆきとあきくとあきくと神代

あきく神代ゆきとあきくとあきくと神代

後二位為子

神代ゆきとあきくとあきくとあきくとあきくと神代

貞和元年豊受太神交還言事の時神代書

装束以て検知してたのめしむ

小槻匡遠

あきくとあきくとあきくとあきくとあきくと神代

神々々々

友原朝村

すまふに開かへたり事なりとありは神々の人

ふんへん

ありては身とまをりてすはの世とけくたのうれ

神祇とまをせけり

院清襲

すまふに開かへたり事なりとありは神々の人

神々々々

神祇伯資茂

すまふに開かへたり事なりとありは神々の人

志木田守藤

すまふに開かへたり事なりとありは神々の人

後三位常昌

あまやのあまを神の天地とまのりありは神々の人

百首あえまのりていさ祝言

大納言歌實母

あまやのあまを神の天地とまのりありは神々の人

神々々々

権保正良瑜

あまやのあまを神の天地とまのりありは神々の人

普光園入道前宮白左大臣

あまやのあまを神の天地とまのりありは神々の人

正安元年六月後宮御賀茂社に御奉り給ふ時

御供にさくらふんをさくらりてあまをさくらりて

ついでにやまぐりやう 後三位氏之

年とてかゝる家のゆき次第うつらひのゆき神さうらん
こゝろきこうめて

龜山院御製

と氣を又いのちのたがへたの成るの雲あつゆふ
貞和元年十月院時宗約事案今九月社上まう
てまう時宗のちのちまうれいらあう

うしんくしん

ちんじんくしんたりんじんと衣神のあつゆふ
院時宗のまうれいらあう
けけけけ

友原雅成

馬ふか松家の川海よりうしんくしん
文保百まうまうりまう時

後山平前左大臣

暁の星まひりまわりのあつゆふ
貞和二年百まうまうりまう時

入道前大臣大臣

百まうまうまうまうまうまう
当社の院時宗のまうまうまうまう
社の上まうまうまうまうまう
まうまうまうまうまうまう

後三位氏之

引きたりの世にあり笑むに世の事なれば

三條入道

三條入道前太政大臣

百病もまらぬ三笠の山をこたわらじけり神おまら

法性寺入道前太政大臣

神のます三笠乃山の月影はゆきけりまのほろろれ

前大納言為世ふませゆらまきり社三斗を言申す

中后祐春

後山とてひそく深月白くもたひあはれ神やうたえ

延和廿一年京極御息所まきり社まきり堂御

やちとの國のつらさにかたりてらあり

躬恒

花の喜日此花乃草も木もふらふ喜ふあふとあは

後中多院宰相典侍春日社を合とて人々もま

ゆとこれ神紙の心と前大納言為定

まらふふらふて友誼の指りてるなりはあはれん

元弘三年立后月次辱死し喜ぶ祭は儀式ありあ

後醍醐院御製

まらふらふもあはれせよ花乃多花の花はあはれ

等持院懸き文句

りあふとあはれ神も喜ぶ祭もあはれなり神はあは

内侍のゆらふ春の祭りあはれんひらひらまきり

花園院御清緒

神皇正統記の如くは、
百首の歌を、
此の巻の序に

前開白

さゆ此の如くは、
春日の神事、
あまのこゝろ、
久のこゝろ、
いづれをさう、
あひてらる、
神事、
述懐、
前大信正良信

さるごとくは、
寄松述懐、

前氣淑為長

一、
赤元百首、

津守國冬

神皇正統記、
元亨、
神祇、
と、
弘安八年、

う海のたれをみたりたふねりたのふたりのかき得

二品法親王慈道

此の神のまはれしやとておきてと成すか傍のま

法印定為

をくひるまかけとなのえ年とあこの一ととあめり書

前大僧正慈順

たのじそまの結ろねくまはれし神とすくとおきて

権僧正慈傳

まのりまの神地の子め縄をくまあすうりてあめり

左若湯者有義のませつらう日若社等納七首其

中に花盛開といふ事と

源和氏

あつて暖まあふ神きうりたの多極の雪とせえんは

祝部团长

神のつらまのそのの霧ありてむのけを冬入其の月

客入権現を動寺座主を今の時らあといふあり

まの事とむひくまあり

前大僧正道玄

正記の神のむあをえうりておたすまえあり雪の白

後依目院日若社に三社のむひをけはと徳師和夫

候正行新精のつらまの瑞後其年有入社の皇子

也遊けありをれ敷風勅書とくまをうり書とあ

徳作のり

徳正のり

吾人などふのりなる者もたふれ神のり見たりと

神祇のり中

源清氏朝臣

かてせとていひあふらふ水ありたふふ名とてあり

貞和二年百三のりありと

等持院殿左大臣

今よりとていひあふらふ水ありたふふ名とてあり

末のりあり

法...
...
...

...

...

...

...

...

